第11回「変化しないのは悪である」スポーツ吹矢は時代の求め

「山は西からも東からも登れる。自分が方向を変えれば新しい道はいくらでも開ける」
これは「経営の神様」と称されるパナソニックグループ創業者・松下幸之助さんの名言です。「既成概念にとらわれていては、なかなか新しい発想に立つことはできない」という戒めです。青柳清も同様の考えを持つ経営者でした。

×　×　×　×　×　×

青柳清は１９７８年（昭和53年）、41歳でいわゆる脱サラして東京・銀座に書店チェーン「ダイセイコー」を立ち上げました。
まず初めに書店を手掛けたのは、その前の職場で出版の仕事を担当、その方面に人脈があったからです。でも青柳清は書店が決して良い職場とは思っていませんでした。当時の多くの書店は「暗い、やる気がない」というのが青柳清の印象でした。
それを最初のビジネスに選んだのは「既存の書店は欠点がはっきりしている。だからそれを改善すれば、他の書店に勝つ良い店が作れるのではないか」と考えたからです。
これはまさしく松下幸之助さんの名言にも通じる「発想の転換」です。青柳清は当時の名刺に「日本一底抜けに明るい書店をめざすダイセイコー」と刷りました。お店を快適な空間にするために店内でお香を焚く、小鳥のさえずりをテープで流す。そんな常識破りの挑戦はやがて実を結び書店は順調に客足を伸ばし、全国に19店舗を展開するまでになりました。

スポーツ吹矢は人生１００歳時代の生涯スポーツ

しかし創業７年目の１９８４年（昭和59年）、青柳清は出版物の行く先に不安を感じ、書店経営とはまったく違うジャンルの通販事業を立ち上げます。きっかけは書店のレジの脇に「健康コーナー」を設け、健康雑誌の記事と連動させた商品を置いたところお客様に大好評だったことからでした。

通信販売はダイセイコーを大きく成長させました。以来、青柳清は「ビジネスには境界がない」そして「変えないこと、変わらないことは『悪』である」とまでいってダイセイコーの事業を変化させていきました。「時代が変わるということは、今までと同じ考えでは通用しなくなるということです。時代が変わるのだから、こちらも変わらなくてはならない」（ダイセイコー社内報２００６年１月号）と。でも皆が時代の変化に気付いてからのビジネスでは後の祭りです。青柳清は「次の世代に何を伝えるのか。私の頭の中はそれを発見するため、今、懸命に模索しています。大地に耳をつけて聞くくらいのつもりです」（ダイセイコー社内報２０１１年１月号）と生涯、努力を怠りませんでした。

今、日本は世界一の高齢社会となり、空前の健康ブームが続いています。青柳清は、こうした時代も予測して老若男女が楽しめて健康になれるスポーツ吹矢を創始しました。

「スポーツ吹矢は必ず国民的スポーツになる」

青柳清がこう断言したのは「スポーツ吹矢こそ人生１００年時代にマッチした生涯スポーツである」と確信していたからです。「一般社団法人スポーツ吹矢振興協会」も75歳以上のマスターズクラスの新しい段位制度を発表するなど青柳清の意思を継いで人生１００年時代のスポーツ吹矢の魅力づくりに取り組んでいます。

（以下、次号）

ダイセイコーのスタートとなった石川県金沢市の１号店